

ユニバESD大会 テーマ：実践力×発信力

大会報告書

日 時：2014年9月22日14：00～21：00、23日9：00～16：00

会 場：岡山国際交流センター2F「国際会議場」

参加者：◆22日：大学生36人、高校生17人、高校生引率教諭2人、中学生1人、一般1人

◆23日：大学生36人、高校生5人、高校生引率教諭1人、中学生1人、一般1人

※内訳（学校名、地域など）は別紙「参加者名簿」参照

1日目・22日

【開会挨拶】築島明氏（環境省中国四国地方環境事務所所長）

今年は「国連ESDの10年」の最終年であり、11～12月に岡山・名古屋で国際会議が開催される。岡山市は2004年に地域拠点RCEに認定され、先駆的な活動が行われている。公民館を中心とした活動の評価が高く、市長を中心に国際会議の成功を目指している。四国四県でも、自然環境や地域特性を活かした活動に加え、モザンビーク支援などの国際的な活動も展開されており、早くからESD活動が盛んな地域だ。

今大会は、ワークショップを通じて、参加者が友情を育みネットワークする機会。活発な議論を行い、今後各地域において青年層によるESD活動の実践が進む契機となることを望む。「国連ESDの10年」後の環境教育推進方策懇談会では、各地域にESDを推進する人材の不足が課題となっているが、今大会の参加者はそれぞれが貴重な人材の1名。この大会を通じて能力・スキルを磨いて欲しい。

【挨拶と資料の説明】竹内よし子氏（ユニバESD大会実行委員長）

配布資料は、プログラムと基調講演資料に加え、大学生による活動発表概要、および分科会の概要を入れているが、それぞれメモのスペースを設けているので、聴きながらメモを取り、MyESDノートになるように活用してほしい。

今大会を受け、11月6日に「ESDに関するユネスコ世界会議サブイベント」を開催し、今大会の成果発表やワークショップを行う。11月6日を目指すとともに、さらに未来に向けてなっていきたい。

人は生まれると自然人。生まれて登録するとその社会の一員となる。学校を卒業して働くようになってからが社会人と言われているが、学生も大切な社会の一員。そのことを認識して参加する意識を持つことがスタート。社会に参画する力を付けてネットワークしてもらいたい。

【アイスブレイク】

松山東高生14人が企画・運営を担当。説明はすべて英語で行われた。

(1) Word Game

2人組でじゃんけんし、敗者は後ろを向き、勝者は前に掲げられた言葉を説明し、敗者が答える。説明は日本語でOK。1問目「生物多様性」、2問目「フェアトレード」。

(2) リレー俳句

同校がある松山市は俳句がさかんであることから、俳句を作るゲーム。

3人がグループとなり、例えば「ユニバ」の1字ずつを最初の文字にして、「ユ→ゆめかたり 二→日本を変える バ→場にしよう」などの句にする。

お題は「世界」

「生物と会話をしよういつまでも」

「セミのなく川のほとりで生きていこう」

「生物の環境守るいい社会」などの作品ができ、紹介された。

(3) グループ作りゲーム

進行担当が吹く笛の音の数の人数でグループを作り、グループで設問を議論する。

①3つの音→3人グループ作り

設問：「16組に一人」とは何の数字か？ 正解は日本における国際結婚の割合。

②6つの音→6人グループ作り

設問：「あなたにとってESDと何ですか？」

「次の世代に伝えたり教えたりする」「いろんな人たちと地域の環境を守っていく」などの回答があった。

続いて、できた6人のグループで自己紹介を行った。

【基調講演】池田満之氏（岡山ユネスコ協会副会長、認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）副代表理事）

◆ESDの10年で取り組まれたことと課題

・ESDは持続可能な社会の担い手をつくることを目的としている。そのためには、現在の社会が持続可能でないことを正しく知り、地球的な視野を持ちつつ、自らの問題として捉えることが必要。

・Contribution（貢献・努力目標）は参加しやすいが、温暖化防止目標のように「がんばったが達成できなかった」という結果も招く。そうではなく、Commitmentすなわち、社会的責任を伴う公約としていくべき。日本人は地球2.4個分を使用する生活をしているので、1個分に減らすために、意識と行動を変える必要がある。

・この10年で、世界的にはRCE（ESDの地域拠点）が2005年時点の7カ所から130カ所に増え、拠点づくりは進展した。また、毎年優良事例を表彰する制度があり、やる気を高めている。

・学校教育では、一人ひとりの意識を変え、さらに、社会教育・行政・NGO等とつながり合い影響し合う関係作りが必要。

・国内では、宮城県気仙沼市における学校教育をつなぐ事例、岡山市における公民館を中心とした社会教育をつなぐ事例などが先駆的である。

・岡山市では議員提案により「持続可能な開発のための教育の推進に関する条例」が制定され、「ESD市民活動推進センター」が市役所中に設置された。さらに、図書館がESDコーナーを設置し、拠点として推進の役割を担っている。

・環境省では、「+ESDプロジェクト」として、ESDの担い手が結びつくためのプラットフォームを提供しているほか、地球環境基金でESD活動を助成。さらに、今大会をはじめとする、ESDユネスコ世界会議の支援事業を展開している。また、学校でESDに取り組むために、「ESD環境教育モデルプログラム」作成事業が全国で取り組まれている。

・ユネスコスクール加盟校（小・中・高）は、2008年4月は24校であったが、2014年4月には705校となった。

・社会的には、ISO26000では、社会的責任を企業だけでなく、あらゆる組織団体・ステークホルダーに求めている。経済界・産業界・NGO/NPO間、マルチステークホルダーのコミュニケーションが必要とされている。

・文部科学省と環境省がコラボして、愛称「今日よりもいいアースへの学び」や、キャラクターが制定された。

・ESDの10年間に個々のESD活動は進展したが、動きがばらばらであると認識されており、つながり感のある動き、連携するパートナーシップづくりが次のステップとして必要である。

・未来への展望として、グローバルアクションプログラム（2015～）案が検討されており、5つの優先分野が考えられているが、その一つがYouth。今大会の内容が活かされることを願っている。

・岡山で開催される「ESDに関するユネスコ世界大会」の公式会議への飛び入りは無理だが、岡山コンベンションセンターにおけるイベントは展示・体験OK。サイドイベントには、公式会議出席者の参加も見込まれるため、そのような人との接点・交流もできる。いろいろなかたちで国際会議に関わってほしい

◆ESDを地域で推進するためのポイント～具体事例：岡山市北区京山地区

・岡山市は人口70万人で37ブロックあり、1地域（約2万人）単位で、「地域総働型のESD」を推進している。国連大学RCE地域拠点づくりに近づけようという意識を持ち、学校間の連携とともに、社会教育・学校教育・NPO・企業と市民センターが連携する仕組み作りを目指した。どこに地域にも基盤はあるはず。京山地区では、公民館運営委員会がベースとなった。「京山地区ESD推進協議会」は、幼稚園・省・中高のトップが役員となり、責任を持つ仕組みにしている。

・「どんな社会にしたいのか」という目標があり、地域で共有することが必要。そのために、「地元学」の手法で有形・無形の地域遺産など、地域のあるもの探しを行った。

自分の地域を自慢できますか？ 地域の自慢を3つ以上いえますか？ 地域に意識が向いているかどうかが問われる。自分達の地域だという意識が必要だ。

・地域のいい面悪い面をESDの視点から捉え、それらを踏まえてどんな地域にしていきたいかについてワークショップを行い、目標を立てた。その達成のための人づくりもESDの手法で行っている。

※京山地区が目指す地域像：目標1～5と具体的な活動は、配布資料参照。

・参加者は活動を通していろんなことがつながっていることに気づき、自分が地域の一員であることを実感するようになった。ESD10年市民会議の代表として小泉首相にも面会した当時小学校5年生だった子どもが、大学の教育学部に入り、公民館に何かできることがないかとやってきた。「継続」も教育には重要だ。

・ラジオ番組「ESD・未来の子どもたちへ！」で発信も行っている。インターネットラジオなので、全国で聴いてほしい。

・「未来は変えられる」「私たちは社会を変えられる」という意識、「イノベーションを起こす」という意識を持って今大会に参加してもらいたい。そして、夢を語り合い、実現して日本を変えていくきっかけとなる、2日間になることを期待している。

【大学生の活動発表】

コーディネーター：佐野淳也氏（徳島大学地域創生センター助教授）

- ・知っている人が同じグループにいる人は、知らない人がいるグループに適宜移動。実行委員も加わって、新しい6人のグループで座り、5分間自己紹介。
- ・グループに模造紙1枚、ペン1セットを用意。発表を聞きながら、「ここがESDだ」というところを各自が模造紙に記入。文字でも絵でもOK。3つの事例発表後、グループで話し合っ共有する。

◆発表① ESD 活動 in 岡山

西原直也氏（岡山大学環境部 ECOLO）

- ・ECOLOは部活動団体でメンバー40人。
- ・主な活動は「リサイクル市」、「京山ESD活動への参加」、「半田山開拓プロジェクト」。
- ・リサイクル市：卒業生が使っていた、捨てるにはもったいない家電・家具を、ECOLOが譲り受けてきれいにし、安く新入生に提供。3RとESDについて手作りのポスターを制作して展示も行っている。
- ・京山ESD活動への参加：「春の環境てんけん」では、川で小学生と魚を捕ったり、水質調査を行った。情報をまとめて共有し、生物多様性について考えた。キャンドルナイトも実施。「緑と水の道」プロジェクトでは、灯籠流しを実施するなどして、水・道と触れ合い、持続可能な社会づくりに取り組んでいる。
- ・半田山開拓プロジェクト：半田山は岡大の裏にある山だが、放置され整備されていない。「緑と水の道」のように、半田山の環境を改善し、楽しめる場所にしていこうと取り組んでいる。
- ・今大会で得られたことを新しい活動に活かしていきたい。環境に関するイベントあれば、声をかけてほしい。

Q：リサイクル市を新入生に伝えるには？

A：新入生のためのイベントでPRしている。

◆発表② こどもが運営するまち「とさっ子タウン」

大野悠里氏（とさっ子タウン実行委員）、吉武亜寿香氏（同）

- ・子どものまちの高知県バージョン。10年続ける目標2014年で6年目になる。子どもが400人参加する。
- ・まちでは、子どもが働いて稼ぎ、納税、買い物する。本物の機能があり、社会の仕組みを体験できる。仕事はプロの大人が教えてくれる。例えば銀行では、お札を本物の機械を使って数え、税金を受け入れる。TOSという通貨が流通している。
- ・市長と議員を隔年で選挙する。今年は市長選だったが、公約を作って立候補する。本物の投票箱を選挙管理委員会に提供・協力してもらっている。再選を果たした市長が、高知市長と町を良くするためにどういう政策が行われているのかなどの対談も行われた。
- ・どうすれば町の中が良くなるか改善点を考え、ゴミ箱設置、子ども同士のコミュニケーションを進めるイベントも実施している。税金が上がったり、給料が上がることも。市民の意見を聞く目安箱が設置されている。
- ・まちには遊ぶところもある。箸拳など、芸子さんがお座敷遊びを教えてくれる高知らしいコーナーも。

まちの中を走る路面電車、食いしん坊市場（フードコート）、ノンアルコールカクテルがあるバー、着物の着付け・考古学の授業・お茶の入れ方などのアカデミーもある。また、新しく店を開くこともできる。

・とさっこタウンを支える仕組みとしては、県内の協力店が売り上げの一部を寄付したり、人気商品を+100円で販売して100円を寄付するなどして、運営資金に充てている。

・実行委員は大学生と社会人が担い、いろんな企画することによって、大学生にとってもESD的な学びができています。

Q 大野さん、吉武さんは、いつからとさっこタウンに関わっているのか？

A 大野さん：2009年にスタッフとして参加、翌年から実行委員。吉武さん：今回初めて関わった。

◆発表③ 奈良教育大学ユネスコクラブ～第3回ESD子どもキャンプを中心に～

後藤田洋介氏（同大ユネスコクラブ4回生）、二階堂泰樹氏（同）

・ユネスコクラブは60人。活動目的は「ESDを実践できる教員になること」、「ESDの行動化を楽しく追及すること」。

・E：ええやん（他者理解）、S：それ（ってどうなん？批判的思考）、D：どや！（行動化）

・クラブは、最初は7人からESDを学ぶこと、地域の教材化からスタート。

・「道普請」、「交流会」、「子どもキャンプ」を実施している。

・「子どもキャンプ」は、小中学生と大学生が体験的に学ぶ場。小中学生40人、大学生50人が参加。

ならまちの昔の写真の現在の場所を探す→古いものが残っていると考えていたならまちも変わっていきんだと気付く→自分たちのまちは自分たちでつくっていかねばならないことに気付く などの活動を行った。

・さらにキャンプでは、大学の中にテントを張る、銭湯体験、ムービーで成果発表会などを通して、仲間の大切さ・移り変わることに発見・文化と自然と人のつながりを尊重する姿勢などの気づきがあった。

「未来のまち子どもアンケート」では、「自然豊か」、「戦争のない社会」、「今の良さと昔の良さを未来に伝えたい」などの意見が出された。

・その他の活動として、ESD学会、子どもたちのファシリテーション、多摩大ユネスコクラブとの交流、十津川道普請（道の修復）ボランティアなどがある。

・クラブ名が入ったブルーのポロシャツを着ているが、学内の学生の5%を占めるので、学内では浸透してきた。

・本大会の開始前に、備中高松城を訪ね、史跡看板を見ていたら、おっちゃんが説明してくれた。一周ぐるっと巡り、地域の人たちと話す景色が変わると感じた。

Q：子どもキャンプの対象は何歳？

A：小学5年～中学3年。子どもが40人に大学生が加わり、全体100名規模で行っている。

◆語り合いの時間

・3つの発表の「こういうところがESDなんじゃないか」をグループ内で交換。

・グループで「こんな発見があった」ということを全体で共有。

・グループからの発表①

3つの発表を聴いて、**ECOLO** の活動は地域とつながって展開されており、「とさっ子タウン」は子ども達がプロから教わり、大人がしていることを知ることから、地域に興味を持ち、「奈良教育大ユネスコクラブ・子どもキャンプ」では、昔あったものなくなっている→どうしてないのか→歴史を勉強したいという思いが芽生えるという流れができていて、3つとも地域の活性化につながっていると思った。楽しみから愛着が生まれ、活動の原動力となっている。やれと言われてではなく、やりたいという動きが大切だと感じた。

・グループからの発表②

「とさっ子タウン」の反響が大きかった。子どものうちから体験することは大切だが、子どもっていつまでだろう。小さい子に限定されてしまう恐れがあるのではないか。高校生にもこのような機会があっても良いという意見があった。また、上の世代との関わりが持てることが良いと感じた。

・後半の発表を聴くために、グループの構成員をシャッフル。各グループでホストを1人決め、ホストだけ残り、残りの人はなるべく知り合いがいないテーブルへ移動。新しいグループで自己紹介を行い、ホストは前グループの話し合いのポイントを説明。

◆発表④ 「影響して&されてこそ大学生」

永岡志穂氏（近畿大学工学部生物化学工学会）、高木裕太氏（同）、實重美沙氏（同）

・工学会は学科ごとにある生徒会で、イベントの運営や技能を活かしてイベントに参加するなどしており、その関係で行った **ESD** について発表する。

・大学祭で使われた大量の廃油を有効活用できないかと考え、バイオディーゼル燃料（**BDF**）にリサイクルする取り組みを行った。植物由来の廃油を化学反応させて燃料化すれば、再生可能な燃料となるため、カーボンニュートラルが実現できることに着目した。

・大学祭の廃油は他の部活・サークルの廃油も集めて **BDF** にリサイクルした。

・広島環境大学で学んだ **3R** をもとに、同大学で知り合った方々からの協力もあり、つながりを感じた。

・廃油を化学反応させてエンジンの燃料にするには、複数の工程があるが、作業工程のものを持ってきたので見てほしい。

・東広島新聞にこの活動が掲載され、人と人とのつながりを再度認識した。

・最初のきっかけは、「この油もったいない」という思い付きだった。ゼロからスタートして、問題に当たると挑戦し、行動してつながって実現までこぎつけることができた。

「できることやりたいことを探す」＋「解決方法を発想する」ことが大切だとわかった。

E：影響して、**S**：されてこそ、**D** 大学生 と、つながりを実感した。

Q：**BDF** はどんなものに使えるのか？車だけ？

A：法律で認められたところしか使えない。使った企業は運送業で、試験段階である。

Q：廃油はどんな油から？

A：主に揚げもの油。とんかつ油・菜種油・パーム油・サラダ油の廃油を使用した。

Q：廃油を使った車はえび天のにおいがするが、BDFの車どんなにおい？

A：化学反応の過程はとっても臭い。ゴミが混ざっているのです。

◆発表⑤ モザンビーク＋愛媛発 ESD

山下貴史氏（香川大学）、柏菜穂子氏（愛媛大学・インターンシップ）、関家麻希氏（東雲短期大学・栄養学）

・NPO法人えひめグローバルネットワークでは、「銃を鋏へ」プロジェクトに参加し、松山市にある放置自転車をモザンビークに提供する活動を行っている。同国では内戦中には子ども兵も存在し、社会に武器が蔓延しており、それらを自転車などの生活物資と交換して平和構築に寄与する取り組みである。

・回収された武器の5%は武器アートとして再生され、平和を訴えかけている。
・首都マプトは都市化が進み、スマホを持っている子どもたちがいるが、100キロ離れた村では子どもが川で水汲みをしている。住んでいるところで服装や体格にも格差が生じている。

・栄養面でも格差がある。食事内容を比較すると、都会と村の食卓では、選択肢の幅に違いがある。都会では、ピザ・パスタ・サラダ・肉類と広く選択ができるため、意識して野菜をとると健康的な食事ができる。一方村では、シマ＝トウモロコシの粉の割合が大きい。また、朝ごはんを食べる習慣ない。糖質・タンパク質・脂質・ビタミン・ミネラルをバランスよく摂取することが大切。特に村では十分なたんぱく質の確保が喫緊の課題。

・同時に複数の栄養素を摂れる食材として、注目されるのがモリンガ。豊富なたんぱく質とビタミン含み、成長が早くて育てやすい。現地で栽培し、フェアトレード商品を開発して輸入し、日本の欠食児童に配布するなど、商品化を目指したい。

・縫うという字は、糸へんに逢うという文字であり、モザンビークと日本の人と人をつなぐという意味も込め、刺繍のプロジェクトに取り組んでいる。

・例えば1人目が笑顔を刺繍すると、2人目が双葉を刺繍、3人目が花を刺繍する…など、会ったことのない人とつながりを感じながら、自分の願いを加えていく。「縫われている思いを共有できた」などの感想があり、このリレー刺繍をESD発信ツールとして活用していきたいと思うようになった。

・焼畑やゴミ問題など、海外で起こっていることは先進国に無縁ではない。

・SDGsにもESDを加えることができるように、今後もつながりを持たせていきたい。

Q：回収した武器の5%が武器アートになるとのことだが、95%はどうなっているのか？A：発火処理するなどして処分される。武器アート作品は、メッセージ性が強い。

Q：活動が生活の糧になっていくなどの発展はないか？

A：モリンガは根から葉の先まで利用できる。ヨーロッパ系の企業では、種が高級オイルになるために商品開発されるなど、様々な取り組みが進んでいる。モリンガでクッキーを作るなど、フェアトレード商品開発していきたい。松山東高校と商品開発も検討中である。

◆発表⑥ 市民と学生が語り合う場、それが「ティーチン岡山」

後藤歩氏（岡山大学教育学部社会科教育学ゼミ）

・「ティーチン岡山」は、大学生と市民が集まって今世の中に起こっている出来事や社会問題について

て意見交換する場。これまでに 11 回実施。第 10 回は 5 月に開催し、「日韓両国のより良い関係を気付くには」、第 11 回は「岡山の人なぜ温羅伝説にひかれるのか」をテーマに開催した。

・温羅伝説は桃太郎伝説の元と考えられており、ESD 世界会議が開催されるため、地域について考える ESD と関連するものにしたいことから、テーマに選んだ。31 人が参加し、アイスブレイク、温羅伝説説明、グループワーク、共有という流れで行った。

・グループワークでは 5~6 人が 1 班となり、温羅伝説の概要、桃太郎伝説と結び付けられた背景、総社市ではアピールがあまりされていないことなどについて、議論が行われた。途中、グループ間で意見交換したことにより、深まりが出た。

・「温羅伝説を利用してアジアな岡山にしよう」→吉備国の人びとは大陸からの文化を受け入れて共生していた。独自性がある。共生・受け入れる心を PR していく。

「温羅伝説を活用して人と自然がつながりあう岡山」→施設めぐり、マラソン、つながる場づくりなどに取り組む。

「うらをかえせば」→多面的にみる大切さ。伝説にはいくつかの解釈がある。自分たちがつくるフリーの踊りを創作する。

など、まちづくりに結び付けるアイデアがまとめられた。

・成果としては、一人ひとりが伝説を活用した岡山のまちづくりを考え、幅広い年齢層の話し合いができたこと、岡山の魅力を再発見できたことが挙げられる。

・参加者にどう問題意識をもってもらうか。また、新しい参加者の確保が課題である。

・市民と学生が語り合う場として継続させていきたい。

◆発表⑦ 福島の除染の現状と広島ならではの支援について

岡川眞和氏（広島国際学院大学大学院修士課程 1 回生）、藤村治氏（同）

・福島相馬市では、放射線セシウムが土壌を汚染したため、除染が行われ、土壌除染の廃棄物（土の表面・枯葉など）は黒い袋に入れられているが、中間保管場所が不足し、畑など生活環境の中に置かれている。

・同大学では、放射性物質のセシウムを吸着する性質を持っている光合成細菌を研究している。広島は福島と同じ被爆地としての歴史がある。広島と福島のつながりを ESD に活かして研究・実験を福島と連携しながらやっていきたい。

・現地に行くことによって知ることができる、行動してみてもわかるが多かった。福島には行動力のある人が多かった。よりよい環境・社会になっていいたらいいと思う。自分たちの気づきを伝えたいと思った。

・情報提供：本大会のチラシは福島から避難してきた人が絵を提供してくれた。被災後、絵を描くことができなかったが、3年半を経て描けるようになった。心の除染が必要。人が関わる中で、次に歩みだせるようになって感じている。（竹内よし子氏）

◆語り合いの時間

・「こんなことが見えてきた」などをグループで話し合った後、全体で共有した。

・グループからの発表①

ポイントは「つながり」というワード。「E：笑顔でつながる S：すばらしい D：出会い」というESDにまとめた。

・グループからの発表②

がんばっている人がもっとがんばれる仕組みについて議論した。同じ考えを持っている人が集まって認める、伝える、発想が広がる、サポートが得られるという、仕組みが必要。

・グループからの発表③

前半の発表は地域や子どもなど明るい取り組みが中心だったが、後半は貧富の差や原発問題などへの取り組みで、考えるほどどうしたらいいかわからない課題がテーマだった。裏には経済の関係があり、もっとわからなくなる。それでも、世代・国を超えた感謝の心がそのような問題を動かすのではないか。

◆アドバイザーからのコメント

●吉澤卓氏 (ESD-J 理事)

- ・未来のヒントが詰まった場所が地域。切り口は多様にある。
- ・世代やセクターを超えてつながるときも、大学生がいることで応援が得やすい。若い人を地域が活かすことが社会全体で大切なことである。
- ・土地への愛着を絶たれている厳しい立場の人も多い。どう考えたらいいのか。伝統を守って地域に住めるのは素晴らしいことだが、それができない人がいる現実を感じることも大切だ。

●鈴木克徳氏 (ESD-J 理事、金沢大学教授)

- ・発表の活動はそれぞれ素晴らしかったが、まだ発展途上。例えば、BDFをどうやったらもう少し広がるか仕組み作りを深めると良いのでは。もっとがんばれるのかもしれない。
- ・ESDは少なからずだれでもやっている。ESDは進化続けるもの。もっと良くしていける余地、もっと発展できる可能性を秘めている。皆が連携協力し、もっとがんばれる仕組みを議論する必要がある。
- ・残念だったのは、発表者は積極的だが質問が少ないこと。疑問や感じたこと、思ったことをもっと積極的に伝えてほしい。発信とコミュニケーションに努めてもらいたい。
- ・学生はいかにいい失敗をするかがカギだ。自分で悔しい思いをしてチャレンジできる時期。あえて手を挙げ、どんどん転ぶことで伸びる。それを周りの大人が支えると良い関係ができる。

(事務連絡、夕食休憩)

【分科会と11月6日ESDユネスコ世界会議サブイベントとのつながりについての説明】

●山下貴史氏 (ユニバESD大会副実行委員長)

- ・ESDの実践にあたり、社会的な課題を自分事として捉えることが大切だと思っている。
- ・「今日がホップ、11月6日がステップ、未来がジャンプ」と位置付けて、これからの分科会の時間を過ごしてほしい。
- ・あなたにとってESDは何？「次世代にいまの幸せを伝えること」など、それぞれに答えがあるものだと思う。分科会を通して自分の中で見つけて持ち帰って欲しい。同時に分科会ごとに成果物を仕上げてもらい、それらが11月につながるといいと思う。

【各分科会企画内容の紹介】

5つの分科会それぞれがどのように発信のツール制作に取り組むのか、各分科会担当者が活動の概要を発表し、全体で共有した。

※各分科会活動のねらい・活動内容・成果物と進行計画は、別紙「分科会企画概要シート」を参照。

【分科会活動】21時まで実施。

2日目・23日

【当日の流れの説明、ESDの意義】竹内よし子（ユニバESD大会実行委員長）

- ・分科会活動が、作業に終わらないよう、ESDの発信として将来につながることを願っている。
- ・そのためには、「ESD for ○○」が大切。地球では、例えば1日に小豆島1.7個分の農地が砂漠化している、1日に200種の生物が消滅しているなどの推計があり、多くの持続可能でない現実がある。人口比20%の先進国が地球資源の50%を使い、残り80%の国で50%の資源を分けているが、より良い開発にするために、どのようにこの数字を解釈して方向を決めるか。大切な時間をどう使うか、一人ひとりのMy ESDが大切。「自分是从ここから始めよう」を見つけてほしい。

【分科会活動】13時まで実施。

【分科会成果共有・意見交換】

コーディネーター：吉澤卓氏（ESD-J理事）

- ・各分科会の成果物発表を見て、参加者各人が5枚の色カードで評価・意思表示する。

赤：いいね！ 黄：まあまあ 青：もっとがんばれ 白：なんともいえない

緑：質問あり！／感想

- ・第5分科会から順に、1分科会5分でプレゼンテーションを行う。

※分科会の活動内容詳細は、別紙「分科会企画概要シート」を参照。

◆第5分科会 サステナブルストーリー～つながって つながって つながって～

●発表概要

- ・分科会作業：各自が活動で大事と思うキーワードをA4紙に書き出し、言葉のつながりを見つけて並べる。つながらない部分に言葉を足す。つながったキーワードを伝わる絵に描き、写真で取り込み、PCのスライドショーにしてエンドレスに流れるように編集した。

- ・音楽と手拍子に載せてスライドショーを映し、絵ごとにキーワードをメンバーが交替で話した。

●会場の反応

- ・赤2割、黄7割、青1～2枚

Q：全体としては、何を伝えたかったのか？

A：すべてが繋がっているということ。人の営みの継続性も伝えたかった。

Q：つながってスパイラルアップしていくために、何が必要かを話し合ったか？

A：次へとつながる過程に託することになると思う。

◆第4分科会 ESDリレー刺繍

●発表概要

・分科会作業：モザンビークの女性たちが制作した ESD の文字が入った刺繍に対し、日本におけるワークショップで刺繍が追加された作品に、メンバーが連想するものをさらに刺繍し、刺繍に込めた思いをカードに記入。刺繍を ESD の文字に並べ、布に縫い付けてタペストリーを制作した。

・寸劇によって、モザンビークの女性たちが制作した ESD 刺繍に、日本の学生たちが刺繍を加えることになった経緯を紹介し、タペストリーを披露した。

●会場の反応

・赤 9 割 黄 1 割

Q：刺繍を ESD の文字に並べたのが良かった。カプラーナ（アフリカの布）の利用が効果的だった。刺繍の意味について、もう少し説明が欲しい。

A：モザンビークの助成に 1 枚 30 円で刺繍を依頼。女性の収入源としても位置付けた。例えば、モザンビークの女性が ESD の文字に木を加えて刺繍した作品に、日本で 2 人目が太陽を刺繍、3 人目が木の実を刺繍…というように、連想するイメージを追加して完成させる。また、各人が刺繍に込めた思いをカードに記入するようにしている。それぞれの刺繍はポケット状に縫い付け、カードを入れており、取り出してメッセージを読めるようにしている。

Q：ESD の文字を縫い付けた布は、E：黄色、S：ピンク、D 黄緑 だが、意味はあるのか？

A：モザンビークの国旗の色を採用した。国旗では、黄色は鉱物資源、赤は植民地からの解放、緑は農業を象徴している。

・文字が浮き上がるような工夫が欲しい。

◆第 3 分科会 ESD 風呂敷リレー刺繍

●発表概要

・分科会作業：10 人メンバーがいたので、5 人ずつの 2 チームに分かれて、1 チームが 1 枚の風呂敷を制作した。

・前チームは、すごろくをイメージして、Look back over the past, take a rest, what's ESD? などのコマを設け、バトンを渡すイメージの絵を入れるなど、ESD を意識できるよう工夫した。

・後チームは、中心に地球と木をデザインし、自然・人・地球がつながるイメージを表現した。平和を象徴する鳥や、未来を照らす太陽と続いていくことを表す波をロゴマークのようにしたハンコ、花が咲くことにかけて花の中に ESD をデザインしたハンコなどを使って、周りを彩った。

・風呂敷の使い方（バッグ、スカート、輪っかを使った手提げ、ボディバッグなど）を撮影し、映像で紹介した。

・11 月 6 日に向けて、ネットでメンバーがやりとりをしながら、デザイン、大きさを再度検討して風呂敷を制作し、舞台上で使い方を披露したり、ファッションショーをすることなどを検討した。

●会場の反応

・赤 9 割、黄 1 割

Q：(会場へ) 買うならどっち？

A：すごろく 7 割、地球柄 3 割

Q：すごろくの風呂敷は既製品のように仕上がっていて、縁取りが赤いデザインもよかった。赤にした理由は？

A：結んだときの表情がいいから。

- ・布のサイズも、皆で協力して制作しやすい大きさだった。
- ・横浜などはスカーフのプリントを行っている業者がある。中四国でもそのような地域性のある産業とつながるとおもしろい。

◆第2分科会 Happy で発信するみんなのESDイメージ

●発表概要

・分科会作業：ESDを堅苦しいイメージではなく、噛み砕いて身近な幸せを表現して伝えたいということになり、そのためにマインドマップを作成した。ホワイトボードの真ん中にHappyを据え、メンバーがHappyと思うのは何かを挙げ、その言葉から連想することを地図のようにつなげて書き出していた。そこから、阿波踊りが楽しく、生きがいと声があり、阿波踊りや盆踊り（炭坑節）をダンスに加えた。

- ・11月6日に向けて、動画をしっかり編集し、YouTubeで発信することを計画している。

●会場の反応

- ・赤4割、黄6割

Q：画像からこれからも続くイメージ、未完成の感じがあった。

A：他の分科会の様子も撮影して加えたいと希望していた。ワンカットを6秒としたが、もう少し短くても良いと思った。阿波踊りはみんな初心者で、皆で踊ると楽しいという感じを伝えなかった。

- ・自分も動画を編集することがあるので、苦労がわかった。よさこいも入れたら楽しいのでは。
- ・技術のある人は、ぜひこのチームに参加してもらいたい。

Q：阿波踊りが生きがいということだったが、なぜ？

A：兵庫県出身だが、大学から徳島に住むようになって3年目。阿波踊りという地域特有のものを通して出会いが広がった。現地の阿波踊りでは連にも参加してつながりが持てて、地域愛に気付くことができたので。

◆第1分科会 My ESD メッセージを、Our ユニバ宣言へ！

●発表概要

・分科会作業：メンバーで10年後にどういうメッセージを伝えたいかを出し合い、それぞれの言葉をつなげてみたところ、「学ぶ楽しさ」「思いやりから安心へ」「輝く期待」「つながるおもい100%」というフレーズにまとめることができた。それを伝わるよう文章にした。

●会場の反応

- ・赤8割、黄2割

Q：パワーポイントで文章を映し出したねらいは？

A：本当は絵を描いて映すなど工夫したかったが、余裕が無かった。

Q：最後に「アクションを起こし続けます」というフレーズがあったが、メンバーそれぞれにとって具体的には何？

- ・参加者それぞれが「どんなアクションを起こすか」については、この後の分科会の締めでも考えていきたい。

- ・第5分科会メンバーから、参加者それぞれがE・S・Dを頭文字としてESDを表現するフレーズを紙に書き、それを持って写真を撮らせてもらいたいとの提案があった。
- ・写真の受け渡しのために、ラインでつながることの提案があった。

◆アドバイザーからのコメント

●藤岡満樹氏（環境省中国四国環境事務所）

各分科会の発表から、熱意は伝わった。次のステップとして、アクションを聞かせてほしい。

●鈴木克典氏（ESD-J 理事、金沢大学教授）

時間的制約があつてできなかったことがあつた。できるだけ完成にもっていくためにどうしたらよかつたのだろうか？ 11月6日という機会も活かすよう、さらにがんばってもらいたい。

【分科会の振り返り】

分科会ごとに振り返りを行い、さらに、これからどのようにつながっていくか、分科会の成果物を11月6日にどのような状態で発信するかなどを議論した。

【ネットワークづくりに向けて】

コーディネーター：吉澤卓氏（ESD-J 理事）

◆ネットワークに関する情報提供

●鈴木克典氏（ESD-J 理事、金沢大学教授）

・つながるともっと良いことができるのではないか？という期待から、ネットワークづくりが検討されるが、どのようにネットワーキングしていけるだろうか。

・新しいネットワークをつくる方法と、既存のいろんなネットワークに参加する方法がある。既存のネットワークについても知っておいてもらいたい。

・ユネスコスクール関係では、ユネスコスクールネットワークとユネスコスクール支援大学間ネットワークがある。ユネスコスクール加盟校は現在全国に700校以上あるが、全体の1%であり、まだまだ知られていない。

・RCEのネットワークは、協働の機会作りのための対話のプラットフォームとして設立された。いろんな人たちが様々なESDの活動をしているがみんなばらばらなのが現状で、学校、美術館、博物館が連携すると、より良い活動ができる。地域レベルで考える必要がある。

・その他にも、高等教育機関のネットワークがある。

・大学の学生たちによるネットワークとしては、国内では、大学のユネスコクラブのネットワーク、エコリーグなどがある。世界の若者たちのネットワークとしては、Youth Group Youth フォーラムがある。これらについては、文科省が参加者を公募しているが、認知度が低い。このような機会を利用して世界に出て行ってもらいたい。

・既存のネットワークへの参加の可能性も考えてもらいたい。

◆ネットワークづくりに何が必要かについて話題提供

●水野翔太氏（名古屋わかもの会議発起人法政大学法学部政治学科2年）

・「若者から名古屋を盛り上げる」をコンセプトに昨年結成。東海地方の高校生・大学生が参加。

- ・ネットワークを形成し、持続可能なものにするために必要なことを考えた。
- 「熱い想い」「真剣に向き合う」「Impact（かっこよさ、ユニークさ）」例えば、国会で高校生 100 人が国会議員と討論する場を創造したことなど。
- ・「僕にはできないが、僕たちにはできる」。すなわち、人と人とのつながりが重要で、ESD そのもの。
- ・1人ひとりが責任を持てる仕組みも重要。難しいが、役割分担が大切。
- ・情報を共有すること。
- ・大人へのアプローチ。真摯に向き合う姿勢が必要。
- ・次の世代につなぐ意識。
- ・ESD はこれからが大切。最後に、「自分と未来は変えられる」という言葉を共有したい。

◆ネットワーク・情報共有を支援する仕組みについて情報提供

・一番難しいことは継続することで、そのためには、元気を分かち合う友達がいることと、それを支える仕組みが不可欠。その一つとして、各地に EPO（環境パートナーシップオフィス）がある。

●常川真由美氏（四国環境パートナーシップオフィス所長）

・全国に 7 つの EPO があり、四国には四国 EPO（高松）、中国地方には EPO ちゅうごく（広島）、近畿地方には近畿環境館（大阪）がある。

・行政、NPO、学校など多様なセクターとの横断的な連携を支援している。また、活動発表の場や知り合う機会づくりを行っている。

・想いをかたちにするために、様々な支援と情報提供を行っており、気軽に相談できる窓口なので、積極的に利用してもらいたい。

【総評】池田満之氏（岡山ユネスコ協会副会長、認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議（ESD-J）副代表理事）

・2014 年は 8 月 19 日が、人間による自然資源の消費量が、地球が 1 年間に再生産できる量を超えた日と言われている。今も普通に生活ができていますが、この日以降は、地球がもたらす生態系サービスを赤字状態で使うことを意味し、これまでに蓄積された資源を目減りさせている。現実を踏まえて、社会を変えるためにアクションすることが待たなしで求められていることを意識して、ESD に参加してもらいたい。

【参加者のコメント】

●岡川真和氏（広島国際学院大学大学院）

ESD の知識もなくやってきた。知ることができて感謝している。第 1 分科会で「アクションを起こし続けます」という一文を入れたが、自分のアクションは「一歩踏み出す勇気」だと思っている。

●山下貴史氏（ユニバ ESD 大会副実行委員長、香川大学）

一歩踏み出す前に壁があると感じることもある。「東京」というだけで壁を感じるが、中四国のネットワークで対応できたといいと思った。中四国くらいの広がりでは出会える機会はほとんど無かったので、今大会は貴重な機会となった。今後もネットワークして、自分が持っているネットワークとつなげ、水の輪のように広がるといいと思う。友達にも影響を与えていこう。

【閉会挨拶】 足立晃一氏（環境省中国四国地方環境事務所高松事務所所長）

・未来は変えられる。例えば、皆さんが生まれる前は、ゴミ箱は真っ黒で全てが一緒に捨てられていたが、今は何でも入っているゴミ箱はない。10～20年で変えられる。変えない選択もあるが、がんばれば変えることができる。勇気を持って変えていく。そのためには、続けることが重要だ。柔軟な考え・若い力でがんばってほしい。

・井上日奈子氏（愛媛大学）から、当大会に関するアンケートの協力依頼があった。（卒業研究の一環）集計結果はフェイスブックにアップして共有するとともに、当事業の報告書資料とする予定。

以上





